三人の夜

仁科透

講談社

三人の夜

定　価　一一〇〇円
著　者　仁科　透
装　幀　安彦勝博
昭和六十年三月十五日　第一刷発行

発行者　加藤勝久
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二-一二-二一　郵便番号一一二
電　話（〇三）九四五-一一一一（大代表）
振替東京　八-三九三〇
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂
© Toru Nishina 1985 Printed in Japan
乱丁本・落丁本は小社書籍製作部宛にお送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-06-201826-8(0)（文二）

目次

序　章　5
第一章　秘密の部屋　12
第二章　青いネクタイ　35
第三章　三人の陳述　61
第四章　神と鬼　95
第五章　夏の雨　125
第六章　追跡　163
第七章　ビールと煙草　184
第八章　強制捜査　199
第九章　証拠の提供　223
終　章　256
あとがき　259

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

三人の夜

序章

(1)

赤坂の豊川稲荷を右に見て、緩やかな坂を上り、国道二四六号線が渋谷へと延びて行く。いわゆる青山通りである。

青山一丁目の交叉点までは右側に赤坂離宮の石垣が続き、左手には青山ツインビルや銀行のビルが空間を占領する。

外苑前のあたりから幅広い道路の両側に商店が立ち並び始め、青山三丁目、表参道、青山五丁目へと綺麗な街並を形成する。コーヒー、洋品、パン、クリスタルグラス等の専門店が店頭や内装に各々趣向を凝らし、眺めて歩いていても楽しい雰囲気を盛り上げる。

梅田画廊はその通りの花屋の隣りにあった。

梅田画廊といえば、その道の専門家の間で最近一つの評判が定着した。それは、新進画家又は無名の画家が格別優遇される画廊——つまり、早い話が、彼らの画が自分自身の予想以上の好条件で取引されるということであった。

委託販売形式でかなりの手数料を画廊に召し上げられるのに比べ、梅田画廊の場合は現金で仕入れ

てくれるのだ。その先、画廊がどれだけの商売をするのかは画家の関心事ではなかった。

ここまでの話なら特に警察を刺戟する筈もなかったが、その画の買い手の殆んどが大住商事であるという情報が警視庁捜査二課を動かすことになった。

梅田画廊の代表者は梅田くみ子という女性であって、梅田くみ子は加納巻雄議員の実妹であるということが分った時点で、梅田画廊は捜査二課の捜査対象となった。何故なら、加納巻雄議員と大住商事には何らかの黒い関係があるという容疑を既に警視庁が抱いていたからである。

容疑に関する情報は、大住商事の競争相手である五光物産の社員から入った。情報提供の動機はブラジルに於ける原子力発電所建設の国際入札で大住商事に敗れたことにあるらしく、その入札では暗に加納議員から圧力をかけられたことも訴えていた。

最初の情報は、加納の二号がママになっている六本木のナイトクラブは大住商事の接待交際費で成り立っているという何処にでもあるようなもので、警察の腰を上げさせるには到らなかったが、二番目の情報は警察にとって興味あるものだった。

この春から中央競馬にデビューした競走馬「カノーファースト」の入手径路を調査されたし、という内容であった。

「カノーファースト」の馬主は加納巻雄であったが、一年半前にこのサラブレッドをイタリアから輸入した輸入元は大住商事であり、二名の馬主が交替して加納の手に渡っていた。調査の結果、馬の所有権移転に伴う金銭授受の方法は、表面上合法的ではあったが、黒い関係の容疑が氷解するという形でもなかった。

梅田画廊から二人の男が真夏の日射しが照りつける歩道に出て来た。警視庁捜査二課の警部立石悟郎と若手刑事の松川健作である。立石は長身であり、腹に贅肉がないので、長い脚が一層その身にス

ラリとした感じを与えていた。だが彼の筋肉はよく引き締まり、若い頃から鍛え続けてきた肉体であることが一見してよく分る。松川は上背は普通だが、丸っこい身体の上に同じく丸い顔がのっていて、何となく人なつっこい感じがする。

「一休みして行こう」

立石が松川を誘った。この界隈では喫茶店は探すまでもない。二人は冷房のよくきいたコーヒー専門店に入った。

水を運んできたウエイトレスに立石はコーヒーをホットで、そして松川はアイスで、注文した。

立石はポケットから手帖をとり出すと、記憶が消えないうちにというように、せかせかとペンを走らせ、書き終えて松川に見せた。

七月の売上げより

小田省也　残雪の妙高　十号　百八十万円

村木修一　ランプと少女　六号　百五十万円

鳥倉　明　幻想　八号　二百四十万円

「梅田画廊の売上げ帖簿の中の例だ。いずれも大住商事が買手だが、想像するに画廊のいい値で購入していると思う。画の値段のチェックは美術年鑑か専門誌を見れば号単位で個人別に分るし、専門家に聞くことも簡単だ。これらが実体より高値かどうか、その辺のところはすぐ分る」

「実際の売買は公表価格の半値というのもあるそうですね」

「所詮、需要供給の関係だから、価格はあって無いようなものだし、特に新人の場合は値のつけようがないのだろう」

「画商は、新人の画を大変な安値でトラック一台も仕入れて、その中の出来の良い物を選んで売値を

つけ、全体をつり上げて大儲けするという話を聞きましたが」
「それはうまく行ってのことで、商売人なら誰でも考えることさ。売れない間は金利負担がかかるし、全体のリスクもあるしで、そのやり方は必ずしもボロイとは云えない。寧ろ問題は、梅田画廊に最も有利なように、大住商事が無差別、無審査、無交渉で画を購入しているかどうかで、この確率は非常に高いと思うのだ」
ウエイトレスがコーヒーを運んで来たので二人は会話を中断した。
ウエイトレスが去り、コーヒーを一口すすってから松川が口を開いた。
「大住商事のそのような買い方が明瞭になったとしても、加納議員への贈賄の証拠には不充分ですね」
「その通りだ。梅田画廊の実質経営者が加納氏だとしたところで、取引は合法だ。間接贈収賄の方法だとするならば極めて知能的だね。仮りに、売買の事実がなくて、金銭だけが動いていたという場合でもあればまた取扱いようも出てくるのだが」
「例のサラブレッドの件も怪しいものですし、思い切って大住商事の手入れをしたらという意見もありますが」
「家宅捜査のことか……若い連中が血気にはやる気持は分るが、強制捜査をして何も出てこなかったでは済まないよ」
立石は松川を直接さとすように云った。
「次はどう進めるのですか?」
松川は捜査の方法を訊いた。
「少し揺さぶりをかけるか……それにはと、梅田くみ子と面接してみるかな」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「実質経営者ではないということが分るだけでしょう」
「それもそうだな。よし、大住商事に正面攻撃をかけよう。課長に相談してからのことだが、先方の経理の責任者から事情を聴取してみるか……何故、画を購入する必要があるのか？　何故、梅田画廊からだけ購入するのか？　購入基準はどうなっているか？　その画は何処に保管されているか？　購入を記録した帖簿は？　必要資金の流れは？　……さんざ揺さぶれば突破口も見えてくるものだ」
「馬の件もあります」
松川は画より馬にこだわっているようだった。
立石はまた手帖を繰って日程表を眼で追った。
「大住商事の責任者とは八月四日に会うとするか、それまでにこちらも質問の準備を整えよう」
「呼ぶのですか？」
「いや、未だ参考人にする訳にもいかない。日時を指定してこちらから会いに行くさ」
立石は日程表の八月四日の欄に、大住商事経理責任者面接と記入して手帖をポケットに収めた。

(2)

――モシ、モシ、須山ですが、瀬木専務ですか？
――わたしだ。
――夜分お帰りのところを申し訳ありません。実は今日夕刻、警視庁の捜査二課から面会依頼を受けました。
――君、一人にか？

―ハイ、経理部長にという申し入れでした。八月四日の午後二時、社に来るそうです。
―内容は？
―教えてくれません。梅田画廊に調査が入ったことですし、その関連とは思いますが……
―タレ込みの相手が分ったぞ。五光物産の国際部の部長だ。入札の失敗で自分の立場が悪くなったので血迷ったらしい。
―何をタレ込んだのでしょう？
―梅田画廊もそうに違いないが、馬の件についても充分想像出来る。本人が自分でウロウロ嗅ぎ回るからこちらにも分るのだ。
―それらも含めて八月四日の対策が必要です。
―そうだな。家宅捜査もあり得るという情報もある。書類を始末せんといかんな。
―それで取急ぎお電話させて頂きました。明日にでも関係者で相談したいのですが。
―ウム、そうしよう。裏金操作を知っているのは、我々の他は資金課長と課長代理の二人とそれにシンガポール大住の社長だけだな。
―そうです。また、それだけはいませんと操作出来ません。
―そんなことは云わんでも分っている。その他に知っている者はいないかと訊いているんだ。
―失礼しました。他にはおりません。
―当局は加納氏への贈賄容疑を固めつつあるようだが、M氏のことは嗅ぎつけていないと思う。
―そちらの件で近々来日するJ・M・ハインケルという男はどんな人物ですか？
―日本語とポルトガル語を含め七ヵ国語を巧みに操る金髪のドイツ人で、国際取引の特殊ブローカーだそうだ。

――信用出来ますか？
――先方の社長の委任状を持ってくることになっている。今回の商談に限れば信用出来る。
――M氏に引き合わすのですね。
――その段取りは直接わたしがやる。君は金の方の都合だけ予定通りやってくれ。
――明日で全部出来ます。
――明日は資金課長と課長代理も入れて書類の始末を相談するが、今夜のうちに、捜査二課の件などを二人に知らせておいてくれ。
――承知しました。

第一章　秘密の部屋

(1)

大住商事の専務瀬木昌之は、一人の外国人と肩を並べてホテルのロビーに姿を現わした。

そのホテルは古くから四谷にあったが、最近近代風に大改築を済ませ、特に観光目的で来日する外人客で賑わっていた。

瀬木はこのホテルの常連であり、既に連絡がよく行き届いていたと見えて、フロントの係りは瀬木の顔を見るなりにっこりと微笑んで会釈した。

「いらっしゃいませ、瀬木さま。万事うけたまわっております」

係りは瀬木の連れの外国人にチラッと視線を投げた。

瀬木も大柄な体格だったが、連れの男は身長一八五センチ程で瀬木より一〇センチは高く、スポーティな半袖シャツから出た太い腕に金色の毛がまつわりついている。髪は栗色と金色の中間で眼はブルーだった。

トランクを部屋に運び入れるためにボーイが近寄ってきたが、瀬木はボーイを手で制した。フロントの係りは部屋のキーをノーサインで瀬木に渡した。万事うけたまわっております、という意味の一

つである。
瀬木がキーを持ち、金髪の男はトランクを鷲づかみに握り持って二人はエレベーターに乗った。
エレベーターを十五階で下りる。ルーム・ナンバー一五〇一。
建物のコーナーに位置したその部屋は眺望もよく、ツインのベッドと応接セットが別部屋になっているスイートである。
部屋がロックされ、二人は応接セットの所で立ったまま顔を見合わせた。金髪の外国人が持っていたトランクを静かに下に置く。
「ハインケルさん、ようこそ、日本へ」
瀬木は日本語で云った。
「ミスター瀬木、お会い出来て光栄です」
ハインケルと呼ばれた男が流暢な日本語で応じた。初対面の正式な挨拶を二人はこの部屋に入るまでしていなかったということだ。
「あなたが、ブラジルのベルナルデ建設会社の代理人であるハインケルさん本人と確認したいので、私に失礼な質問を一つだけ許して貰いたい」
「どうぞ……瀬木さんは多分、ベルナルデ建設会社の社長からの暗証番号をお訊ねになりたいのだと思いますが」
「その通りです。社長のマリオ・フォルセット氏からは昨夜電話があり、その番号を知りました。その数字を云える人はハインケルさんしかいないと云っていましたよ」
「そうです。私がハインケルです。ミスター瀬木に会ったら直ぐ伝えろ、とマリオ社長から云われました。私の身分証明番号は、0—8—4—2—0—0—3、です」

「0—8—4—2—0—0—3、オーケー、私は大住商事の瀬木だが、私の番号はない」
瀬木は笑いながら右手を差し出した。
「大丈夫です。その質問をするのは瀬木さんしかいません」
ハインケルも笑った。二人は握手を交わしてから椅子に坐った。
「コングラチュレイション、先ず、ブラジルに於ける原子力発電所建設の落札をお祝いします」
「有難う。あなた方の協力のお蔭です。競争相手の強敵で最終まで残ったのは、日本の五光物産とアメリカのマリオン・トレーディング社でした。五光物産は価格で勝負してきたし、マリオンは安全技術の特許とブラジル政府へのコネで一時は最も優位に立っていました」
「しかし、結局のところ、ブラジル政府へのコネの強さは、ベルナルデ建設のマリオ社長と大住商事サイドのミスター加納の力がより上回った訳ですね」
「そうです。あなたは何もかもすっかり御存知なんですね」
「無論です。私は国際取引の裏のプロです。だが、ミスター加納が何故ブラジルの高官たちと親密なのかは知りません」
瀬木は愛用のパイプに煙草をつめて、火をつけた。
「その理由は至極簡単なことです。加納氏は若い頃、スタンフォード大学へ留学していました。その時の学友の三人が現在、ブラジルの高官になっているのです。遊び友達は国籍に関係なく親しくなります」
「よく分ります。ところで、私が来日した主目的は、ベルナルデ建設会社を原子力発電所建設工事の主要建設業者としてほしいことにあります。そのためにこそマリオ社長も落札に運動されたことは御承知の通りです。ミスター加納を動かしてくれたミスター麻利岡への謝礼やお願いもあなたと一緒に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com